

〈近代ヨーロッパの社会思想を再考する〉

戦後啓蒙, 市民社会論, ケンブリッジ思想史研究への関心

田 中 秀 夫

I 思想史研究の現状

ケンブリッジ大学を拠点とする思想史研究(中心は政治思想史であるが, 社会思想史的な広がり Scope を持つのが特徴である)は, 1960年代にラズレット, ポーコック, スキナー, ダンなどによって刷新され, 1960年代の末から新しい思想史研究のスタンダードを形成してきた¹⁾。それは今日国際的な影響力を持っている。とりわけ, スキナーの論文「思想史の意味と理解」(1969年)²⁾は画期的な方法論として受け止められ大きな反響を引き起こした。彼らはコンテキスト主義を共通の方法として採用しているが, それはテキストを意図, 背景, 外部との関係で理解するもので, テキスト主義に対立する。インターナリズムよりエクスターナリズムに近いものの, コンテキスト主義は通俗的マルクス

主義のような還元論ではない。コンテキスト主義は要するに歴史的分析の精緻化である。

コンテキスト主義は, テキストそれ自体を直接に分析して理解することを全面否定するわけではないとしても, それで理解できるのは一部に過ぎず, テキスト主義的分析ではおよそ十全にテキストを理解することは不可能だという了解をもっている。それはテキスト主義がしばしば依拠する分析哲学の手法を排除するものではないが, 分析哲学的言語分析を自己充足的なものとは見なさない。またテキスト分析においてオースチン以来の言語行為論の成果を援用することを否定しないけれども, それで充分だとは見なさない。歴史的なコンテキスト抜きにはテキストの正しい理解は不可能であると考えている。

思想史に関係する他の学問的な潮流においても, 1960年代には新しい展開が見られた。例えば, イングランドではマルクス主義の一定の新しい展開もみられ, レイモンド・ウィリアムズの文化と思想の研究や E・P・トムスンなどの民衆思想史が注目すべき成果をあげており, それはやがてカルチュラル・スタディーズへと展開を見せる。また同じ時期にフランスでは, 一方ではアナール派の華々しい歴史研究と, 人類学, 言語学, 精神分析学, 象徴分析, 経済学, 社会学など多くの分野にまたがる構造主義からポスト構造主義へのさらに派手な展開が見られた。ハーバーマスの活躍も同じ頃に始まった。

ケンブリッジ大学を拠点とする思想史研究とアナールの社会史研究との間には, 一種の並行現象が見られるように思われるといえ, ケンブリッジの過大評価であろうか。それにくらべ

1) 成果として華々しくなったのはその時期であるが, 起源はさらに遡る。すなわち, ケンブリッジの思想史研究の刷新に貢献したピーター・マンツ, サルモン, ポーコックがニュージーランドからケンブリッジに来たのは1947年から48年にかけてであった。オーストラリアからラブがオクスフォードに来たのも同じ時期である。1949年にラズレットは自らの研究に基づくフィルマーの政治著作集を刊行した。ポーコックはケンブリッジの思想史研究の起点をここに求める。したがって, 思想史研究の刷新は戦後まもなく始まったというのが正確かもしれない。ポーコックのキース・トマスへの反論の手紙 (Antipodean Historians) を参照, *The New York Review of Books*, Vol.52, No.16, Oct. 20, 2005.

2) Quentin Skinner, "Meaning and Understanding in the History of Ideas," *History and Theory*, 8, 1969, pp. 3-53. Later in *Meaning and Context*, ed., by James Tully, Polity Press, 1988. (半澤・加藤編訳『思想史とはなにか』岩波書店, 1990年)。なお本稿での文献の指示は, 枚数の制限等のために中途半端なものとなっていることをお断りしなければならない。

れば、哲学の伝統の強いドイツにおける、例えばフランクフルト学派の業績は、哲学はしばらく措いて、思想史に関して言えば、ハーバースの名声にもかかわらず、総体としては、必ずしも目立たないように思われる。それは学派の業績が哲学的で抽象的であるということによるとともに、現代に力点を置く傾向が強いことにもよるであろう。

アメリカでは多種多様で、斬新、意欲的な研究が膨大に見られるが、この両集団のようなアプローチの一体性は見られない。現代思想における「社会研究のニュー・スクール」New School for Social Research、ラヴジョイ³⁾やボアズ以来の伝統をもつジョンズ・ホプキンス、ハーバード、デューク、シカゴ、ラトガース、スタンフォードなどの諸大学は重要な研究者と研究成果を輩出してきたが、それぞれはケンブリッジやアナルほどの学派的共通性もなく、まして学派というのは適切ではないであろう。ワシントンの「フォルジャー・シェイクスピア図書館」Folger Shakespeare Libraryの付設研究所(Folger Institute)の研究プロジェクトにはケンブリッジとの連携が見られるが、しかし、これもまた学派というべきものではない。ただし、シュトラウスとその弟子たち(シュトラウス派)は例外的に学派に近いものを形成している。重要なのは、それぞれの拠点をもつ研究集団は今では相互に影響を与えながら、歴史・思想史研究をダイナミックかつ精緻に推進しているということである。とはいえ、ケンブリッジ思想史グループとアナル学派が交流するのはずっと遅れてからのことに過ぎないし、部外者には、いまだ交流は始まったばかりという印象があるのも確かである。

他方、わが国の西欧思想史研究はダイナミズムを欠いているという印象がある。そうだとすれば、そのことはわが国では思想史研究のメ

ジャーな拠点形成ができなかったことと関わるであろうし、人文社会科学系の大学院への資源の投入の乏しさ、さらにはリベラル・アーツとしての教養軽視の風潮に根ざしているように思われる⁴⁾。研究環境は厳しいけれども、アナルやフランクフルト学派、あるいはアメリカの公共哲学などへの関心と同じく、ケンブリッジの思想史研究に現在わが国の研究者は強い関心をもっており、多くの研究者が熱心にその成果をフォローしている。

わが国の学問的文脈にあっては、構造主義やポスト構造主義、アナル学派の社会史とともに、ケンブリッジの思想史研究は、マルクス主義的方法的な後継者としての役割を果たしているのではないだろうか。戦後日本の社会科学を主導したマルクス主義は、機械的な図式的思考に陥る傾向によっても、またイデオロギー的にも、没落を余儀なくされた。社会主義の没落は決定的にマルクス主義の力を奪った。

マルクス主義の対立物はポパー流の方法論的個人主義であり、それはより精緻な社会科学の方法を提供するかに見え、思想史もその方法を吸収しようとしたが、それにも限界があった。原子論たらざるを得ない方法論的個人主義もまた理論的、抽象的という限界とともに機械的という限界をもっているから、社会分析、歴史分析、思想史分析にはより緻密な方法が必要であることが早晩明らかとなったからである。けれども、それが一定の役割を果たしたことは否定できない。すなわち、ポッパーから始まりトマス・クーン(パラダイム論)やラカトシュに受け継がれた科学哲学の方法論の模索は、哲学的分析や言語行為論とともに、マルクス主義に代わる社会分析の方法を育てることに寄与し、スキナーとポーコックの文脈主義、言語の政治学を生み出すことになった。これもまた言語論的転回の一つであった。

3) スキナーの批判にもかかわらず、ラヴジョイとケンブリッジの思想史研究の近い関係を指摘したディギンズの論文が最近出た。John Patrick Diggins, "Arthur O. Lovejoy and the Challenge of Intellectual History," *Journal of the History of Ideas*, Vol.67. No.1, Jan. 2006.

4) 教養軽視の風潮がアメリカではなほだしいことが、シュトラウス派のアラン・ブルームなどの著作で訴えられたことは周知の通りである。Allan Bloom, *The Closing of the American Mind*, New York, 1987. (菅野盾樹訳 [アメリカン・マインドの終焉] みすず書房, 1988年)。

わが国においては、ウェーバーの方法論も、マルクス主義ほどではないとしても、思想史研究において重視され、頻繁に援用されてきた。ウェーバーの傑作『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』や宗教と経済の關係に注目する比較宗教社会学の方法は、経済史においてのみならず、思想史においてもしばしば参照された。少なくとも1970年代まで、わが国のマルクス研究の水準もウェーバー研究の水準もきわめて高く、それが思想史研究に大きな影響を与えていたと思われる。けれども、近年ウェーバー方法論の思想史への援用は格段に少なくなっている。

こうして、今では、マルクスとウェーバーの方法に替わるものとしてのケンブリッジのコンテキスト主義について語るができるのではないだろうか。また実際にケンブリッジの思想史研究の方法は従来の思想史方法論を乗り越える方法的総合という性格を持っていると思われる。そしてそのことは戦後啓蒙と市民社会論の終焉とではなく、その継承と発展という文脈に關係があるように思われる。

戦後啓蒙⁵⁾を代表する社会科学と市民社会論がどのような特徴もっていたか、戦後啓蒙の思想史の遺産はどのようなものであったか、ふり返ってみよう。

II 戦後啓蒙の思想史研究

1960年代末の日本の思想史研究は、戦後に復活したマルクス主義に立つものが圧倒的に優勢で、ブリテンやフランスにおけるような新しい方法論の登場による刷新などはなかった(高島善哉、内田義彦、河野健二、水田洋、その他)。マルクス主義を方法とするこの時期の知識人は、依然として、資本主義は富の唯一の源泉である

労働を搾取する不正な社会で、正しい社会は労働に依拠して取得する社会主義であると考え、傾向が強かった。

他方、大塚久雄とその弟子たち(戦後日本において彼らの歴史研究は大塚史学と呼ばれて宇野派と対抗したが、宇野派とともに1980年代頃から急速に衰退し解体した)が典型であるが、マルクス主義そのものというよりは、「マルクスとウェーバー」という方法意識を掲げた人々もあった。内田芳明や山之内靖などがその代表である。ここでは社会主義はさらに相対化され、社会主義をも蝕んでいる官僚制化が批判の対象として意識され、近代化の原理としての合理主義的市民的勤労の倫理、近代社会を形成する近代人のエートスが強調される傾向が強かった。

マルクス派も大塚史学などの近代派もともに一括して戦後知識人と呼ばれた。そして戦後の思想史研究は、法学部、経済学部、文学部、人文社会科学関係の研究所等に所属する研究者によって、それぞれ若干ニュアンスをとまないつつ遂行された点に、日本の特徴がある。しかし、概して今述べたようにマルクス主義を多くの場合基盤とするという点で共通点があった。言い換えれば、1960年代までの戦後啓蒙——戦後啓蒙は学園紛争で終焉する——はマルクス主義で始まった。そして戦後啓蒙全体への西欧の影響は圧倒的で、フランクフルト学派とフランスの実存主義から構造主義を中心とする西欧マルクス主義の影響はきわめて大きかったように思われる。

ただし、マルクス主義に意識的に依拠しないという傾向も他方では存在した。とくに政治思想史においてはそのような傾向があった。例えば、戦後の政治思想史研究を代表する丸山真男の場合、英国経験主義とウェーバーやマンハイムなどのドイツの思想的伝統を批判的に摂取しつつ思想史研究の方法と視座を構築したが、それは経済決定論的傾向の強いマルクス主義への無関心ではなく、関心があるがゆえの、意識的な、マルクス主義ではない立場・方法の構築であった。丸山は旧制高校時代から大学生の時

5) 戦後啓蒙という概念は必ずしも一般的に用いられているわけではないが、戦前をアンシャン・レジームとして意識し、戦後にその払拭と自由で民主主義的な開かれた市民社会の形成を課題として意識した知識人の社会科学的な営為を包括的に表現する概念として、利用価値があると思われる。杉山光信『戦後啓蒙と社会科学の思想』新曜社、1993年を参照。

期にマルクス主義文献に相当深く接触しており、学問の方法としてのマルクス主義を習得していた。やがて、70年代以降、この丸山のような立場が、有力になる。丸山とは違って、本質的にマルクス主義者であったと思われる、ピエール・パールの翻訳と注釈・研究に特化していった野沢協の超人的な仕事、日本のファシズムに全力で取り組んだ藤田省三の仕事も、安直なマルクス主義の援用でないことは言うまでもない。

もちろん、このような概観は充分なものではない。より細かく見れば、清水幾太郎のように左から右へと急旋回した知識人もいれば、生松敬三のように欧米の思想潮流に敏く、紹介に徹するタイプもあったし、プラグマティストとして一貫した鶴見俊輔と『思想の科学』グループもあったから、思想史研究の立場には相当の多様性があった。反ファシズムをモチーフとした羽仁五郎『ミケランジェロ』(1939年)は、ミケランジェロの生涯を描いて、自由都市フィレンツェ市民の自治と独立を謳歌するもので、この当時も今もわが国には稀な、共和主義的市民社会思想の表明であった。ルネサンス研究に軸を持つ林達夫、「人民戦線」の思想を追究した久野収などもある種の市民社会派と考えることができるであろう。さらに竹内好、桑原武夫、加藤周一、吉本隆明、山口昌男などがアカデミズムを超えて大きな影響力を発揮していた。⁶⁾

それでは、戦後啓蒙においては、マルクス主義対、非マルクス主義という対立が機軸だったかと言えば、おそらくそうとは言えない。なぜなら、両派の有力な論者たちはいわゆる「市民社会派」⁷⁾を形成したからである。丸山、大塚

内田を代表とする市民社会派の学問は、程度こそ様々であるが、マルクスとウェーバーを共通の素養とするとともに両者の方法を重視し⁸⁾、イギリスの政治学と経済学やフランス啓蒙から近代化、自由主義、民主主義の思想を引き出していた。丸山と内田は、大塚久雄や川島武宣とともに、市民社会派を代表し、高島善哉、小林昇⁹⁾、河野健二、水田洋、平田清明なども市民社会派と見なしてよい。むしろ戦後一貫して、この時期までの日本の思想史研究は市民社会派がリードしてきたということができようであろう。

市民社会派は日本の諸問題を意識しつつも、西欧近代を直接の研究対象とするという特徴があった。市民社会派は西欧近代が生み出した(相対的に自由で平等な社会としての)市民社会と市民社会の理論を究明し、わが国に未確立の市民社会を確立することを目指していた。西欧近代の市民社会は平等で自由な社会として丸ごと理想化されることはなかった¹⁰⁾が、しばし

を採用しているつもりであるが、その近隣あるいは外部により多様な「市民社会派」の存在を予想しており、したがって杉山の限定は狭すぎると考える。すなわち、筆者はもう少し広い範囲の知識人を包括する概念として市民社会論や市民社会派を用いるべきだと考えており、したがって、また後に述べるように市民社会論を一種の総合命題に要約できると考えている点で異なっている。具体的、個別的に、多様な市民社会派相互間の明確な区分線を示すことも、マルクス派との明確な区分線を示すことも困難である。

8) マルクスの方法とウェーバーの方法は、共通項以上に差異が大きいが、市民社会論者には共通項を強調する傾向があった(とくに大塚久雄、内田芳明など)。

9) 小林昇は論壇に登場することのなかった碩学であるが、小林のアカデミックな仕事は、ステュアートを頂点とする重商主義、古典派経済学者スミス、後進ドイツの国民経済学者リストを相互に比較対照してそれぞれの特徴を際立たせつつ、経済学の形成過程を彫琢し、学問としての経済学(理論と政策の関連)の特徴を解明することを通して、市民社会としての、また資本主義社会としての近代社会の形成の論理を極めることにあったから、その意味で独自の特徴を持った市民社会派に含めることができるであろう。小林が参照したマルクスの労作は『資本論』に劣らず『経済学批判』と『剰余価値学説史』である。小林の厳密な経済学史の方法(歴史的文献的アプローチ)は、私見では、コンテクスト主義を先取りするものでもあった。

10) 高島通敏『「60年安保」の精神史』(テツオ・ナジタ他編『戦後日本の精神史』岩波書店、1988年)84ページを参照。市民社会派と近代主義の関係が疑問になるであろ

6) より広い視野からの優れた概観として、安丸良夫「現代日本の思想状況」(同『現代日本思想論』岩波書店、2004年)を参照。

7) 杉山は「『市民社会』派社会科学」の代表者を丸山、大塚、内田の3人とし、平田清明と望月清司を含めて、3人の政治学、経済史、経済学説史を継承している研究者の集合として「市民社会」派という言葉を用いている(杉山、前掲書、v、杉山光信『戦後日本の市民社会』みすず書房、2001年、iv、75-77ページなど)。「市民社会」論の代表に関しては本稿も基本的に大差ない見方

ば理想化していると誤解された。

III 総合命題としての市民社会論

上述のように市民社会派は一握りどころか、相当大きな広がりがあったと筆者は考える¹¹⁾。市民社会派の思想的源泉はホブズ、ロック、ヒューム、スミス¹²⁾などの英国経験論、自然法思想、ヘーゲルからマルクス、ウェーバーへと展開されたドイツ思想、モンテスキュー、ヴォルテールやルソーなどのフランス啓蒙と文明批判の思想などであったが、英米流の自由民主主義 liberal democracy の批判的摂取にいくぶん力点があったように思われる。市民社会派は社会主義革命にもましてヨーロッパとアメリカの市民革命の研究に関心を示した。市民社会派の思想的源泉がこのように多様であることは、その思想にニュアンスと曖昧さをもたらす傾向ともなったが、自由民主主義への志向という緩やかな共通性によって学問的連帯感も生み出されていたことが重要であるように思われる。

多様な思想的源泉を持ちながら市民社会派としての共通性を持つという意味で、市民社会派の市民社会論はある種の（人権論、自然法思想、経済学、啓蒙思想、マルクスとウェーバー等の、あるいはもっと要約して政治と経済の）緩やかな総合命題であった。戦後日本の思想史研究がもたらした最良の遺産はこの総合命題としての市民社会論であり、それ以外に今なおアクチュアリティを持ちつづけている遺産があるかどうか

らうが、ここでは前者は後者の一種であるただけでこう。戦後日本の近代主義には多様な類型があったが、それを整理することも本稿の課題ではない。

- 11) 山口定『市民社会論 歴史的遺産と展開』有斐閣、2004年は政治学者としての視点から、より包括的かつ緻密に市民社会論の諸派を論じている。
- 12) 戦後のスミス研究で最も脚光を浴びた内田義彦『経済学の生誕』未来社、1953年の場合、大方の見解と違って、スミスは文明社会の批判者として、マルクスの先駆者として、急進的な思想家、ブルジョア・ラディカルとして描かれて、両者の差異は強調されなかった。スミスの内田によるイデオロギイ的歪曲を唯一正面から批判したのは小林昇であり、両者の応酬は内田—小林論争と呼ばれたが、スミスは産業資本のイデオロギイとして把握し、ラディカルではないとする小林の学問的な批判に内田が充分に応答しなかったために、成果を残さずに終わった。

か疑問である。

市民社会派は、敗戦によって打ちのめされた戦前の半封建的、軍国主義的、絶対主義的な日本社会——それはそれ自体が、列強がアジアに植民地支配を迫ってきた国際環境のなかで、貧窮と後進性を自覚した明治から昭和の国家形成者、為政者とイデオログが、列強に追いつかんとして追求した国家戦略、富国強兵戦略と忠君愛国思想の産物であった¹³⁾——を改めて思想の次元で否定、克服し、自由で民主的で豊かな社会の主体的な形成を価値理念として掲げた。思想史研究自体もそのような価値への迂回的な貢献として位置づけられた。そのような意味で、この市民社会派の市民社会論は、戦後日本の独自の産物であった。市民社会派を緩やかな知識人の連合体として生み出したものは、戦後の時代背景であり、対米従属関係と冷戦構造のもとに組み込まれているという自らの後進性と従属性の自覚であった。とすれば、経済成長と冷戦構造の解体、対米従属観の希薄化、政治的成熟によって、この後進性の自覚が消失するとき、市民社会派は危機を迎えるであろう。

市民社会派の総合命題は、しかしながら、日本の伝統の継承には無関心であった。そもそもそれは日本的なるものの批判と否定から出発していたから、当然の帰結ではあった。確かに、理念としての市民社会の形成、実現にあたって、日本の伝統に生かせるものがないかを模索する関心も若干は見られた（丸山真男、内田義彦）が、総じて、依拠するに足る、継承すべき伝統を見いだすことができなかつた点に、学問的、思想的、文化的弱点があった¹⁴⁾。何もかも外來

- 13) とはいえ、大雑把に言って、19世紀末までは、日本の指導層と知識人の関心は欧米各国に、それなりの均衡を保ちながら、向けられていたけれども、20世紀初頭から敗戦までは、英米ではなく、圧倒的にドイツに向かった。市民社会派と戦後啓蒙は、その意味では、ゲルマン文化からアングロ・アメリカ文化、英米の文化的伝統を再評価する傾向を示した。それは、改めて英国経験論と経済学と政治学を中心とする英米の古典的な社会科学の伝統の再検討と摂取を重視するものであった。

- 14) 加藤周一の日本文化の雑種論を批判した丸山真男の雑居論に対して、神島二郎は日本社会に異質なものを馴化する磁場があるという加藤よりの分析を行った。神ノ

の道具からなる体系は、それ自体が異質性という限界をもつであろうし、土着化の努力が自覚的に行なわれない限り、脆弱たらざるをえないであろう。その努力は晩年の内田義彦が自覚的に追求していたものである¹⁵⁾。

内田は市民社会青年という概念を設定して、明治以後の社会思想にその人間類型を析出した。社会変革の担い手となった人間類型の析出という問題意識に発する研究であるが、そのような視点はマルクス以上にウェーバーが教えた。内田はその視点を大塚から学んだように思われる¹⁶⁾。一方、内田の友人でもあった丸山は、よく知られているように、徳川政治思想のなかに、国学ではなく、儒学、朱子学、とりわけ徂徠学に、内発的な近代化の契機を模索した¹⁷⁾。丸山も、内田も、克服すべき負の遺産を重視したが、継承すべき内発的な市民社会形成につながる要素を伝統社会のなかに見いだせない限り、戦後の地に足のついた市民社会形成は困難であるという認識をもっていたように思われる。けれども、丸山も内田も、市民社会形成の基盤になるような信頼しうる強い伝統を徳川から戦前までの日本社会に見いだすことが困難であった。あえて言えば、彼らは「自律した市民」——それを共和主義的市民といかえてもよいだろう——を発見できないかと夢見ていたのである。しかし、その夢は虚しかった。依拠するに足る伝統の欠如は、その後、わが国の思想界がとどまるどころをしらないかのように漂流を続ける理由である。

日本の市民社会論は世界的にもユニークであったが、それにある程度類似した思想的傾向

をもった学者集団としては、例えば、フランクフルト学派を挙げることができるであろう。日本の市民社会派が戦前の軍国主義、日本のファシズムの克服を最大の課題としたように、ホルクハイマーとアドルノに率いられたフランクフルト学派は、何にもましてナチズムの批判・克服を最大の課題としたし、そのためにドイツとヨーロッパの思想的伝統の再検討を行ない、そこから自由と民主主義の再形成に役立つ伝統的遺産を再発掘した。その起点は1930年代にある。

講座派の影響を受け、一面ではその継承者となったわが市民社会派の業績も、軍国的日本への密かな抵抗として¹⁸⁾1930年代に始まり、フランクフルト学派の活動の開始時期と重なる。ルシアン・フェーブル(1878-1956)とマルク・ブロック(1886-1944)に先導されたアナルの活動もまた同じ時期に始まった。クローチェ(1866-1952)を先駆とし、エイナウディ(1874-1961)からヴェントゥーリ(1914-1994)へと受け継がれるイタリアにおける思想史研究もファシズムの1930年代に重要な結節点を持った。総動員体制への抵抗と反対(人民戦線派)という潮流とこれらの学派の活動は関係があった。また学派の活動は西欧マルクス主義の展開でもあった。ケンブリッジでは、どうだったか。

学派の知的源泉の一人と目されるバターフィールド(1900-1979)¹⁹⁾は、ネーミア史学

18) 戦中に形成された生産力論は、大塚と高島の場合、経済原則を無視した軍国日本の戦時経済の動員主義を批判するものであったが、しかし、社会政策を専門とするものとして昭和研究会に加わった大河内一男の場合は、合理的な総動員体制は支持するという側面をもっていた。藤田省三『転向の思想史的研究』(『藤田省三著作集2』未来社、1997年)185ページ以下を参照。

19) 外交史家として経歴を開始したバターフィールドは、思想史家という以上に広い範囲を扱う歴史家であったが、しかしポーコックの指導教授であったし、その歴史家としての仕事は後の思想史家にも影響力があったと思われる。Sir Herbert Butterfield, *The Historical Novel*, 1923, *The Peace-Tactic of Napoleon, 1806-08*, 1929, *The Whig Interpretation of History*, 1931. (邦訳『ウィック史観批判』未来社、1967年), *The Statecraft of Machiavelli*, 1940, *The Englishman and his History*, 1944, *George III, Lord North and the People*, 1949, *The Origins of Modern Science*, 1949. (邦訳『近代科学の起源』講談社学術文庫), *Christianity and History*, 1949, *History and Human Relations*, /

、島二郎『磁場の政治学』岩波書店、1982年。

15) 内田義彦『読書と社会科学』岩波新書、1985年。内田義彦『内田義彦著作集』第9巻、岩波書店、1989年。

16) とりわけ内田義彦『日本資本主義の思想像』岩波書店、1967年、39ページ以降、105ページ以降を参照。

17) 丸山真男『日本政治思想史研究』東京大学出版会、1953年。丸山のこのような徳川時代の政治思想史研究には、今では、あまりに観念論的のシエマであり、テキストに即さない根拠薄弱な空論だとする批判がある。子安宣邦『事件としての徂徠学』青土社、1990年、ちくま学芸文庫、2000年など。

(委員会的歴史)とウィッグ史観への果敢な批判者としても知られるが、30年代に『ケンブリッジ歴史雑誌』の編集に関与し、戦後1944年の『イングランド人とその歴史』を初めとして陸族と研究を刊行した。しかし、英国にあっては、反ファシズムを先導したのはケンブリッジの知識人であるより、レフト・ブック・クラブに結集したゴランツやストレーチー、ラスキなどであった。クラブができてまもなくスペイン市民戦争が始まった。「フランス革命以来、外国のどの問題も、聡明なイギリスの世論をこれほど分裂させ、あるいは興奮させはしなかった。」²⁰⁾ケンブリッジ大学の学生の多くが人民戦線派の国際旅団に加わって命を落とした。こうした歴史はケンブリッジの思想史研究にどのような影響を与えたのであろうか。

各大学の経済学部でマルクス経済学が制度的に定着したことは戦後日本のユニークな現象であったが、それは市民社会派の基盤でもあった。市民社会派が代表する戦後啓蒙が(講座派的な)マルクス主義に大いに依拠した点は、日本のユニークな特徴であった。しかし、戦後日本はアメリカ軍の占領から再出発し、憲法の制定からして、圧倒的にアメリカの影響を受けざるを得なかった。こうした環境からも、日本資本主義の特殊性を典型的差異として重視する傾向のあった講座派マルクス主義の継承にもかかわらず、市民社会派が英米の近代化(論)の影響を受けることは不可避であった²¹⁾。こうして市

民社会派のマルクス主義は近代主義的傾向をもつことになり、それは生産力の概念を重視する傾向に示された²²⁾。社会を分析するに当たって、階級関係、支配—被支配関係もこの時期には依然として重視されたが、それ以上に生産力の体系として経済社会が理解される傾向が強かった。その傾向は戦後の高度経済成長という進行中の現象に相関性があったと言えるかもしれない。

こうして、この時期の歴史研究、思想史研究は、いまだ思想形成の多様な文脈への十分な意識を持たなかった。その意味で、限られた文脈しか問題にならなかつたけれども、にもかかわらず、ケンブリッジの研究方法を受け入れる素地はすでに形成されつつあったと言えるであろう。それは丸山真男、内田義彦や小林昇の思想史・学史研究が、限定的ではあるが、すでに文脈主義的性格を備えていたことに示されている。3人の学問が文脈主義的であるということを明らかにするためには、個別的な分析と詳細な説明が必要であろう。しかし、ここでは示唆にとどめる。

IV 戦後啓蒙の終焉：

転換する世界とイシューの変化

社会の変化は学問にも変化をもたらす。価値観が変わり、問題意識が変容し、学問の再編成を引き起こす。思想史の方法論のようなものは、社会の変化を越えた長期的持続性をもっているように思われるが、社会観、歴史観の変化を通して影響を受けることも事実である。思想史は歴史学の一分野であるとともに哲学や理論にも密接に関係している。とりわけ80年代以降、歴史学において顕著になってきた歴史の見直し、歴史修正論は、社会構造の変化、思想とイシューの変化と関連があるように思われる。ポーコックたちの英国史の見直しは英国のECへの加盟と関連があると言うが、それぞれの見

²⁰⁾ 1951, *Christianity in European History*, 1951, *Christianity, Diplomacy and War*, 1953, *Man on his Past*, 1955, *George III and the Historians*, 1957, *International Conflict in the Twentieth Century*, 1960.

バターフィールドはE.H.カーとともに20世紀を代表する英語圏の歴史家であるとともに国際関係史における「イングランド学派」を代表する人物でもある。David Armitage, "The Fifty Years' Rift: Intellectual History and International Relations," *Modern Intellectual History*, 1-1, 2004, p.99.

20) A. J. P. テイラー、都築忠七訳『イギリス現代史』第2巻、みすず書房、1987年、69ページ。

21) 講座派と対抗した労農派マルクス主義は典型的差異よりも段階的差異を重視する傾向があり、したがって日本資本主義の特殊性といわれるものも、資本主義の発展によって自然に解消すると考える傾向が強かった。した

がって、その意味で英米の近代化論にいつそう近い面があった。

22) 代表的な現象学的マルクス主義者であった広松渉のマルクス研究の力点のひとつもこの点にあった。

直し論には個別的な理由がある。思想史方法論に見られる変化はマルクス主義の没落のような学問・思想の構造的変化に左右される度合いが大きい。思想史のトピックにも社会の変化が影響を及ぼす。近年の共和主義への関心は共和政体がイシューになっているというより、公共性への関心の影響が大きいであろう。

戦後啓蒙の終焉は急激な社会の変化と並行して起こった。冷戦構造は60年代にすでに破綻をきたしつつあったが、ベトナム戦争以後の社会主義ナショナリズムの相克を経て、東西対立が終に終焉する。社会主義が没落し、自由主義、資本主義、市場社会、あるいは社会民主主義のなかで生きる以外に、望ましい選択肢がないことが明確化した。

1970年までに、経済の高度成長によって日本社会は物質的な富裕を実現した。富裕な社会の実現は、最終的に、マルクス主義の没落をもたらした。ベトナム戦争はマルクス主義の延命に力を貸したが、南北ベトナムの争い、カンボジア紛争、中国の権力闘争などに示された社会主義ナショナリズムと権力闘争は、共産主義の夢を打ち砕いた。東欧圏でも社会主義の失敗が次第にあらわになってきた。

20世紀のユートピアとメシア思想は維持できなくなる。世界的にも、国内的にもイシューの変化が起こる。その結果、市民社会派も解体していく。メシア思想の終焉は、偉大であることの断念であり、英雄倫理の挫折であり、凡庸の中に共存の術を見出すことであり、卓越を国家や政治集団に期待しないことを意味する。

学園紛争による戦後啓蒙の終焉はマルクス主義の終焉でもあった。日米安保条約ははまだ継続していたが、アメリカの一方的な影響を受ける体制という意味でのアンシャン・レジームは基本的に終焉した。より長期的な趨勢としてのアメリカの大衆文化の圧倒的な浸透——それはグローバリゼーションの一側面である——と様々なサブカルチャーの展開が、高級文化、イデオロギー、思想の力を奪っていく。

国際環境も大きく変化する。89年の東欧革命

によって、マルクス主義のみならず、社会主義の没落が決定的となった。それは地球社会全体にとって、一つの終末であり、新しい時代の開始であった。それは、前述のように、メシア思想の終焉²³⁾であり、理想社会の夢の破綻でもあった。ベルリンの壁の崩壊に始まる一連の変動によって、権威主義体制は終焉を迎えた。そのイデオロギーの影響は決定的に大きい。もはや社会主義的な権威主義体制の可能性は幻想となった。

新しい時代と可能性は拡大 EU が開いた。国民国家の枠組を相対化する連合の試みは、自覚的な試みとして歴史的な事件である。そこには真に新しい可能性があるだろう。ヨーロッパ共和国とでも言うべきものが生まれつつあるのだが、同じような試みが、果たしてその他の地域に期待できるであろうか。中国を中心とするアジアの経済発展も、当座は世界の安定に貢献しつつある。アジアにおける専制国家の解体と経済発展は、いまだ十分な民主政治、複数性、民主的政権交替を実現するには至っていないけれども、もはや単純な支配—被支配の論理が適用できるような段階ではなくなった。

しかし、イスラム世界から新しい火種が起こってくるのが予想された。その後のイスラム社会の民族紛争、セクショナリズム、専制政治、そしてテロと帝國的なアメリカの政権との戦い、アラブとイスラエルとの対立などは、容易に解決しそうにない。

こうして、国内的要因、国際的要因の双方から、学問、研究・教育が再編成を余儀なくされたことは確かである。この間、価値観自体には変化したものだけでなく、変化していないものもあると思われるが、社会学者の課題も問題

23) 桜井哲夫は20世紀を支配したのは「政治的メシアニズム」という病であり、ソ連と東欧が代表する「権威主義的サン=シモン主義国家」思想としての社会主義の終焉はそのようなメシアニズム（救済思想）の終焉であったと語っている。桜井哲夫『社会主義の終焉』講談社学術文庫、1997年。ただし、イスラム圏やアフリカなどで、また様々なカルト集団において、ある種の救済思想としてのメシアニズムが繰り返し再生することは否定できない。

意識も、歴史観も大きく変容したように思われる。冷戦問題と東西の体制問題が消滅し、地球環境問題、情報化、グローバリゼーション、福祉、テロ、異文化衝突などが重要なイシューになってきている。歴史の見直しも進んで来た。江戸時代は豊かな時代として再評価されつつある。日本の文化的伝統の再評価も進んできた。15年戦争期の国家総動員体制の再評価も生まれている。

かつて市民社会派のなかで育ち、自らも市民社会派として活躍した山之内靖は、1930年代に西欧でも日本でも同時に総動員体制が構築されたが、これは社会の高度化の必然的帰結であった——「階級社会からシステム社会への移行」——と主張している。そしてこのような歴史認識に立脚して、総動員体制の認識がどの程度あったかという尺度で1930年代の知識人を評価するという見解を打ち出した。総動員体制が客観的な趨勢であったから、その趨勢に即した現実主義的な思想と学問を高く評価しようというのである。こうして当時の体制にコミットした大河内一男が評価され、大塚久雄や丸山真男はその認識が希薄であったという観点から批判された²⁴⁾。これは市民社会論の崩壊の一方向の帰結であると言えるであろう。もう一つは、市民社会論を共和主義的に継承しようとする問題意識の発生であり、これは筆者の立場でもある。

70年代から、わが国の研究者が経験してきたことの一つは、社会の複雑さということである。社会の複雑さは、日本の研究者が痛感しただけではなく、ケンブリッジの思想史家を含む多くの研究者たちが、強調するようになってきた。予期せざる出来事との出会いもあった。ベルリンの壁の崩壊を誰が予言できたであろうか。ソ連と東ヨーロッパの革命は予想を超えていた。中国の経済発展もそうである。こうして決定論や機械的因果推論の敗北が明らかとなった。マルクス主義の図式でも、経済学でも、現実を正

しくつかむことは、きわめて困難である。このような複雑な社会と歴史の変動を理解するためには社会の学問に要求されているのは、理論的には複雑系の論理の解明であり、経験科学としては、歴史的、現実的に、複雑多岐な文脈に自覚的になること以外にはありえなかった。

こうして複雑系としての社会理解が進むに連れて、ハイエク流の自生的秩序の思想のオプティミズムではなく、社会学的パタン認識でもなく、ケンブリッジ学派の文脈主義による歴史研究が、アピールするようになってきた。それはテキストをすべて文脈に還元する還元主義ではない。それはマルクス主義と同じ罠に陥るであろう。テキストに表出された思想、それを構成するまとまった思想、理論、概念、言語の枠組、すなわちパラダイムの持続と変容を文脈的に追及する思想史研究が次第にアクチュアリティをもつようになってきた。他方で、多様性と複雑性に自覚的であるとともに、普遍的な価値としての人権、自由、正義、平等などの概念の精緻な分析とその普遍化可能性を模索する試みも進んできた。ケンブリッジ学派の文脈主義的歴史研究、アナル学派の社会史、ハーバードとフランクフルトの公共哲学というメジャーな学問的・思想的潮流は、無関係に見えるけれども、実は相互に支えあうとともに、相互的緊張関係にある潮流に他ならない。

ポーコックが繰り返し指摘したように、確かに歴史と哲学の差異は存在する。権利、権力、徳、自由、平等といった概念、言語、価値は様々な文化において、様々な歴史的に形成されてきた。その形成の複雑なプロセスに関心をもつのが思想史であるとすれば、現代にまで受け継がれたそれらの意味を分析するのが哲学の営みである。両者は峻別されなければならないが、片方に解消できるものではない。両者はいわばライヴァルとしてそれぞれの目標に向かって、卓越を目指して、競わなければならないであろう。

ケンブリッジの思想史研究、アナルの歴史研究(社会史)、アメリカを中心としドイツにも共鳴盤をもつ公共哲学(リバタリアンとコミュ

24) 山之内靖「方法的序論——総力戦とシステム統合」(山之内靖、ヴィクター・コシュマン、成田龍一編『総力戦と現代化』柏書房、1991年)、その他。

ニタリアン、フランクフルト学派)の隆盛は、きわめて現代的な現象に他ならない。複雑多岐な社会現象や文化の解明の推進と、普遍的な価値の実現の探究とは、根源的につながった現代のアクチュアルな人間学の関心事なのである。

V ケンブリッジ思想史研究への関心

最後に、わが国の戦後の社会の学問において、ケンブリッジの思想史研究への関心が具体的にどのような歴史を持っているか、概観しておこう。

戦後日本のアカデミズムでは、ボルケナウの『封建的世界象から市民的世界像へ』ヤルカーチ、ホブズボーム、ヒルなどのマルクス主義文献、フランクフルト学派、サルトル以降のフランスのマルクス主義的な思想研究、ピーター・ゲイやアレントに代表されるような、アメリカの各大学にポストを得て活躍したエミグレ知識人の仕事などが強い関心を引いていた。また分析哲学には関心が向けられたが、概してマルクス主義以外の英国の思想史研究は注目されなかった。要するに、西欧マルクス主義とアメリカにおけるラディカルな思想潮流への関心といった点に、わが国の戦後アカデミズムの一つの特徴があった。

米国と米軍による占領の遺産が残存する戦後日本において、英米文化はきわめて強いアンビヴァレンスを引き起こしていた。それが社会主義志向をいっそう強めていたが、自由民主党の単一党支配のもとでの経済の回復、自由主義と民主主義の一定の定着は、社会の包容力を高め、また社会の複雑性に目を向けさせることになり、単純な階級還元論、経済決定論を超える、より複雑な社会分析用具を必要とするようになっていく。そのような流れの中で、欧米の多様な社会科学の成果が摂取されていった。

わが国で、ケンブリッジの思想史研究のうち最も早く注目されたのは、ラブレース・コレクションを利用した斬新な成果としてのラズレットのロック研究とラズレット版のロック『統治論』であったように思われる。ロックはしばら

くケンブリッジの研究の焦点であった。そしてそれはロック政治理論の形成を名誉革命に先立つ排斥危機とフィルマー論争の文脈で解釈するという革新をもたらした。次に、神学的前提に注目するジョン・ダンのロック研究が注目された。続いてスキナーのホブズ研究、フォーズの自然法思想家としてのヒューム研究、タリー²⁵⁾、タック²⁶⁾の所有権と自然法・自然権の思想史的研究、この時期には『政治、言語、時間』を通じての、ポーコックのシヴィック・ヒューマニズム研究とハリントン研究などが、同時に関心を引いたように思われる。こうした初期の関心は、ホブズ、ロック、ハリントンなどの個別研究に発するものであって、確かにスキナーの有名な論文は知られていたけれども、ケンブリッジ学派の文脈主義の意義をよく理解して、そのような方法意識からもたれた関心とまではいえなかった。

1960年代の日本は学園紛争の時代で、研究者たちは研究に没頭できなかった。この時期のケンブリッジの思想史研究への関心は、まだ一部の研究者のものにとどまった。全般的印象としては、フランクフルト学派、フランスの構造主義と社会史が圧倒的に影響力をもっていて、ケンブリッジ学派の影響力はほとんど目立たなかった。マクファースンの「所有的個人主義」論²⁷⁾にしても、ケンブリッジの研究者の仕事以

25) ロック研究 (*A Discourse on Property: John Locke and His Adversaries*, Cambridge, 1980, *An Approach to Political Philosophy: Locke in Contexts*, Cambridge, 1993) から出発したタリー (James Tully) はカナダのマギル大学にあって、カナダの原住民問題について発言するとともに、スキナーの方法論集 *Meaning and Context: Quentin Skinner and His Critics*, Polity, 1988, (半澤・加藤編訳『思想史とは何か』岩波書店, 1990年) を編集し、コミュニタリアンとしてのチャールズ・テイラーを論じ (*Philosophy in an Age of Pluralism: the Philosophy of Charles Taylor in Question*, Cambridge, 1994), 現代社会のアクチュアルな多元の問題を論じたシーラー講義 (*Strange Multiplicity: Constitutionalism in an Age of Diversity*, Cambridge U.P., 1995) を出版している。

26) Richard Tuck, *Natural Rights Theories*, Cambridge U.P., 1979.

27) C. B. MacPherson, *The Political Theory of Possessive Individualism*, Oxford U.P., 1962. (藤野他訳『所有的個人主義の政治理論』合同出版, 1980年)。

上に関心を引いた。したがって、そもそもケンブリッジの思想史研究への関心は学界の主流ではなかった。それに注目したのは市民社会派に属するか、その周辺か影響下にいた少数の研究者である。

1960年代から70年代にかけて、ダンのロック研究²⁸⁾の紹介は半澤孝磨、加藤節などが行い、マクファースンは田中正司、平井俊彦などが注目した。タリーのロック所有権研究は田中正司が紹介した。タックの自然権思想史の研究もよく読まれた。1975年にはフォーブズの『ヒュームの哲学的政治学』²⁹⁾が出て、比較的よく読まれた。本書に集大成されるフォーブズのヒューム研究は田中敏弘が詳細に紹介した³⁰⁾。同年に出版されたポーコックの『マキャヴェリアン・モーメント』は、難解さも手伝って敬遠されたように思われる。

わが国において、ポーコックの仕事が次第に理解され、広範な影響が出てくるのは1980年代に入ってからであり、とくにホント・イグナティエフ編著『富と徳』の背後に控えるキーパーソンが彼であることが認識されてからであった。『富と徳』の邦訳は経済学史・社会思想史の研究者が行った³¹⁾。ポーコックの『徳・

商業・歴史』邦訳は1993年に出た（原著刊行後8年）³²⁾が、『マキャヴェリアン・モーメント』は今ようやく邦訳が刊行されようとしている段階である（原著刊行後30年後）。

もとより、ケンブリッジの思想史研究への関心の根底には、研究対象自体への関心、17、18世紀のブリテンの思想史を中心とする思想史への関心、そしてそれに関係するヨーロッパの思想的遺産、学問的伝統への関心がある。すなわち、ブリテンとヨーロッパの古典的伝統と数々の古典的著作、多数の思想史上の遺産の存在が、われわれをひきつけるのである。そうした遺産の形成の文脈、それをいかに受容してきたかという受容の文脈を、詳細かつ正確に解明することの必要性に思想史研究者は直面している。ヘレニズムとヘブライズムに淵源をもつヨーロッパの思想的伝統は、わが国のそれと同じく、ハイブリッドな産物である。そのなかから社会形成の原理を執拗に究明しようとする社会思想が生まれた。政治、歴史、文化を分析的に理解する学問がもたらされた。日本におけるケンブリッジ思想史研究への関心は、やがて日本の思想史的伝統の認識、自己認識の深化にも寄与するであろう。

28) John Dunn, *The Political Philosophy of John Locke*, Cambridge U.P., 1968.

29) Duncan Forbes, *Hume's Philosophical Politics*, Cambridge U.P., 1975. ホントはケンブリッジ思想史研究へのフォーブズの貢献（どちらかといえば軽視されがち）を強調する。

30) 田中敏弘『イギリス経済思想史研究』御茶の水書房、1984年。

31) ホント、イグナティエフ編、水田洋・杉山忠平監訳『富と徳—スコットランド啓蒙における経済学の形成』未来社、1990年。

32) ポーコック、田中秀夫訳『徳・商業・歴史』みすず書房、1993年。